

『“ふと”想い出す～山溪寺悲話』

亡くなられた方を思い出すことは皆誰しもあるでしょう。今日は皆さんにお寺の本堂に上堂していただいているのですが、お寺に参詣して墓参し手を合わせたりご自宅の仏前に心落ち着けて座ったりすると亡くなった方をダイレクトに想い出されるでしょう。今日のお話の“想い出す”は、普段の喧騒な日常生活の中で何かをきっかけにして亡くなられた方を“ふと想い出す”ということでもあります。想い出すきっかけとなる“何か”は人それぞれであろうかと思います。食べ物、品物、風景、誰かの仕草や言葉遣い、映画やドラマのワンシーン……生活の中でこういったものと偶然に触れたりした時にふと想い出すことが多少なりともあると思います。皆さん、目を閉じてほんの少し想いを巡らしてみてください。まだご健在な場合は別として、ご自身のご両親や祖父、祖母、あるいは親しかった知人の方など、ふと想い出されたでしょうか？

少し不躰なこと失礼とは存じますが、何人かに伺ってみましょうか。中井サン、ふと想い出されることはありますか？「母のことを自宅の“桜”を観て時々想い出したりします。また、遠い昔、通園の際に駄々をこねて母をてこずらした記憶があります。ですので、幼い園児の通園風景を見るとふと母を想い出します。」山森クン、如何ですか？「妻の手料理で、ふと母を想い出します。妻の料理の味付けが亡き母に少し似てきたように感じます。私への気遣いかと思うと妻への感謝の念が尽きません。」小林エレクト、どうでしょうか？「甘い卵焼きで亡き母をふと想い出します。」

この問いかけを事前に恒岡光興サンに伺ったことがあります。「出来上がった陶器の“赤”を見ると亡くなった家内をふと想い出すことがあります。この色の評価はいつも家内がしておりました。」

皆さんが今座っておられる本堂……私はこの本堂での勤行の際、時々ではありますが或る人のことをふと想い出すことがあります。400年近く前に亡くなられているので勿論のこと面識はありません。その方のご気性も全くわかりません。その方のお名前は山溪寺の建立者である藤堂高虎公であります。なぜ想い出すということをお話する前にこの寺の創建の由来を少し触れておきます。慶長20年(1615)大坂夏の陣において徳川家康が大坂城(豊臣方)を攻めました。伊賀の藤堂家は戦場の最前線に兵を進めました。最前線というのは現在の地名で言うと東大阪八尾、道明寺(藤井寺)辺りであります。藤堂家の部隊は“若江・岩田の戦い”において豊臣方の木村重成軍と激突し、(全体の戦いには勝利しましたが)残念ながら藤堂家の部隊はほぼ全滅し数百名の尊い兵士の命が失われました。その兵士たちの一族の菩提を弔うために高虎公は山溪寺を建立したのであります。その普請の際に高虎公は寺の本道の向きを北向きにすべきところを多くの犠牲者の方を向け、あえて西向きに建立したのであります。今となっては、高虎公の胸の内は想像だに得ません。藩主として犠牲となった家臣たちを伊賀から見守るため本堂を西向きに建てた心情を察すると、この場で佇(たたず)む時、私は、ふと高虎公のことを想い出すのであります。

亡くなられた大切な方々を普段の生活の中でふと想い出すことは懐かしいものです。月日が経つほど想い出す方も思い出される方も、双方共に心の安寧が得られることでしょう。

“一斉(いっせい)に 奉仕の理想 歌えども 釈迦本尊は 目がテンになり”